

ハムレットの“conscience”に関する一考察¹⁾

五十嵐 博 久

On Hamlet's Conscience

Hirohisa Igarashi

Abstract

“[C]onscience does make cowards of us all,” says Hamlet in one of his soliloquies. Knowing that wreaking havoc and revenge on the Danish throne is a sinful act, but unable to resist the Ghost's exhortations, Hamlet desires to tame his imagination and end his vile speculation by committing suicide. This, however, is not done for “conscience” sake. Overall in *Hamlet*, “conscience” is portrayed as a sacred virtue, whose function is to direct human actions towards the Divine Will. And yet it is equally remarkable that the same “conscience” does not prevent Hamlet from arranging his friends' death. Thus conscience bears at once sacred and sacrilegious aspects. This paper points to this double-sidedness of “conscience” in *Hamlet*, and discusses it in terms of the context in which Shakespeare sharpened his art of equivocation.

序

『ハムレット』3幕1場の有名な“To be, or not to be”独白の末尾に、次のような箇所がある。

Thus *conscience* does make cowards of us all,
 And thus the native hue of resolution
 Is sicklied o'er with the pale cast of thought,
 And enterprises of great pith and moment
 With this regard their currents turn awry,
 And lose the name of action. (*Hamlet* 3^d 1. 85-90)²⁾

亡霊によって命じられた復讐と、その復讐によって達成される王権篡奪という行為が、キリスト教の聖なる法に反する行為であることから、それを成し遂げることができないと悟るハムレットは、罪深い自分の命を絶つことを考える。しかし、自殺も、また、キリスト教が禁じている行為であることから、それも達成することはできない。ハムレットにそのことを教示し、彼を、いわば聖なる方向へと導いているのは罪への意識、つまり“conscience”である。『ハムレット』という芝居は、荒っぽい解釈をすれば、罪深き主体が、その内なる「良心」の声に従って回心を成し遂げてゆく過程を描いたドラマといえるだろう。しかし、テキストをよく読んでみると、どうやら、ハムレットの“conscience”は、主体を聖なる方向へのみ導いているのではなく、同時に、悪なる方向へも導いているかのように読める。つまり、シェイクスピアは、“conscience”という語に表裏する二つの意味を持たせていると考えられる。本論考は、その点を明らかにするものである。

1. ハムレットの“conscience”と聖パウロの教え

まず、“conscience”という言葉に注目してみよう。

シュミットは、シェイクスピアの作品に使われる“conscience”という単語に二つの定義を与えている。一つ目は、「自分自身の行動についてなされる、無意識の道徳的判断」(“the involuntary moral judgment of our own action”)。もう一つは、「包括的な意味での意識、私的な判断、又は

心の奥深くにある思想」(“consciousness in general, private judgment, inmost thoughts”)である³⁾。C. T. オニオンズは、“conscience”の意味をさらに細かく分類している。

1 Consciousness, inward knowledge, inmost thought, internal conviction H5 4.1.118 *By my troth, I will speak my conscience of the King, WT 3.2.46, Cym 1.6.116.*

2 Sound judgement, reasonableness Tim 2.2.175 *Canst thou the conscience lack To think I shall lack friends?*

3 Regard for the dictates of conscience, conscientiousness WT 4.4.646 *Indeed I have had earnest, but I cannot with conscience take it, Oth 3.3.203.*

4 Matter about which scruples are or should be felt Jn 4.2.229 *And thou...Made it no conscience to destroy a prince.*

(C. T. Onions, *A Shakespeare Glossary* より)⁴⁾

この二人の学者の見解を大きくまとめると、要するに、シェイクスピアの言う“conscience”とは、「意識するか否かに関わらず発生する観念」である、ということができる。シェイクスピアの“conscience”に関して一つ特徴を挙げるとすれば、それは、彼の作品には、明らかに“conscience”を有する人物達と“conscience”を有さない人物達とが描かれていて、“conscience”を有する人物達は、例外なく皆、キリスト教徒ないしはキリスト教化された人物達であるということである。ユダヤ人であるシャイロックや未開人種キャリバンに“conscience”はない。また、社会共同体にとっての他者である亡霊や、魔女、それに、悪魔や身分の与えられていない人物達は、通常は、“conscience”を有していない。つまり、シェイクスピアのいう“conscience”とは、キリスト教徒にとってのそれということになる。

近代初期のキリスト教徒にとって、“conscience”という言葉はある一人の人物像と結びついていた。ユダヤ人として生まれ、後にキリスト教徒へと改宗し、十二使徒の一人となった聖パウロ (St. Paul, 紀元1年-64

年)である。キリストが十字架刑に処せられた二年後、旅の途中で神の声を聞いたというパウロは、劇的な回心を経験した。その後は、数々の苦悩に耐えながら、イエルサレム、カイサリア、ローマなど、東西ヨーロッパの広い地域にて布教活動を行なった。そのパウロの思想の中核を成す概念の一つが“conscience”である。

『新約聖書』の全篇を通じて、“conscience”という語は計30回使用されている。そのうち25回はパウロが執筆した部分に見られる。パウロは、ストア派の考えや法律を遵守するユダヤ教の教えを取り入れ、“conscience”という語に新たな意味合いを与えた。そもそも、“conscience”という語の起源は、紀元前5世紀頃、アブデラの原子論者デモクリトス(c. 460-c. 370 B. C.)が用いた“conscientia”という語に求められる⁵⁾。デモクリトスの“conscientia”は、「墮落した生活や行動に対する意識」(“sense of consciousness of evil life or behaviour”), つまり、すでに行ってしまった悪事について反省的に起こる罪悪感を意味していた。ローマ時代になると、“conscientia”という語はキケロやセネカなどのストア派の哲学者によって使用されるようになったのだが、「悪事を行う前に、または、その後に生じる意識」(“antecedent or consequent consciousness of evil”)という意味で使われるようになった。『旧約聖書』には、エホバの法律を遵守する意識は、“heart”と“loin”に宿り、「神」の眼差しがそれらを見透かしているという考え方がある。しかし、これはストア派のいう“conscientia”ではなく、ヘレニズム文化の影響を色濃く受けたもので、デモクリトスのいう“conscientia”により近いものである。アダムとイヴが経験する罪悪感、禁断の実を食する前に生じることはない。一方、パウロのいう“conscience”は、ユダヤ人にとっての法律のように、悪なる行為を禁じる道徳観といえる。パウロが書いた次のような聖書のパッセージに、それを確認することができる。

If any man that believe not bid you to a feast, and ye be disposed to go; whatever is set before you, eat, asking no question for *conscience*

sake. / But if any man say unto you, This is offered in sacrifice unto idols, eat not for his sake that shewed it, and for *conscience* sake: for the earth is the Lord's, and the fullness thereof ...

(1 Cor. 10. 27-28)⁶⁾

キリスト教徒の言う“conscience”とは、パウロの言う“conscience”ということになる。カトリック神学者の E. マック マホンは、

The concept of conscience as a kind of other self, critical voice within one assessing the morality of a concrete situation, finds its clearest Biblical expression in St. Paul.⁷⁾

と述べている。

宗教改革によってプロテスタントイズムがしだいに広く普及しつつあったシェイクスピアの時代、パウロの教えは、人々の精神形成の核を成すものであった。ウィリアム・パーキンズは、“conscience”を、それによって人が自分の思いを、反省的に考える内なるもう一つの知と捉え、それは、人と神との関わり合いの中にのみ生じる「賜物」(gift)であると述べている⁸⁾。日本語の「良心」という言葉は、性善説を唱えた孟子に由来し、「人間が生来もっている善意」を意味するが⁹⁾、パウロの教えでは、それは信仰によって生じるものとされる。パーキンズは、「神」を信仰しない人の“conscience”は「悪質」なものだが、信仰によってそれは「善良」なものとして更生する、と述べている¹⁰⁾。シェイクスピア時代の人々のいう“conscience”は、キリスト教信仰と深く関わっているという点において、日本語の「良心」とは、性質が異なっていた。ハムレットが経験する“conscience”は、孟子のいう「良心」ではなく、パウロのいうキリスト教徒の“conscience”なのである。

初期近代のイギリスにおいて、パウロの生涯が極めて馴染みの深い話題であったことは、いわゆる“The Digby Plays”として現存する芝居の一

編、「パウロの回心」(*The Conversion of St. Paul*)の存在がそれを裏付けている¹¹⁾。また、シェイクスピア時代のロンドンには、パウロの名に因んで、1310年までに約300年の歳月をかけて建築された荘厳なるゴシック建築の寺院(St. Paul's Cathedral)が座を占め、人々の憩いの場であると同時に、文化活動の中心地ともなっていた。1561年には、落雷で一部が倒壊した聖パウロ寺院の補修工事に対し、エリザベス女王御自らが多額の出資をおこなっている。すでに約20万人の人口がヨーロッパの地域はおろか世界中から集結し、他民族が共存する壮大な商業都市を形成していたロンドンでは、治安を維持し、そして、王権を維持するために、聖パウロの名に因んだこの荘厳なるゴシック建造物とその機能を有していたと考えられる。16世紀に描かれたロンドンの鳥瞰図を眺めていると、必ずといってよいほど、聖パウロ寺院が大きな存在感を有しているのは、そうした理由からだろう。

シェイクスピアの『リチャード三世』には、くどいほど何度も“St. Paul”の名が出てくる¹²⁾。王位継承者を次々に殺戮し、王権を篡奪してゆくリチャードは、パウロの存在を意識するにつれ、その心に“conscience”が沸き起こる。そして、その“conscience”は、リチャードの心に罪の意識を植え付けている。このことは、シェイクスピアの観客が、“conscience”をパウロと関連付けていたことを示唆している。パウロの“conscience”に関する考えの一端は、「ローマ信徒への手紙」の次の一節に窺えるだろう。

LET every soul be subject unto the higher powers. For there is no power but of God: the powers that be [*sic.*] are ordained of God. Whosoever therefore resisteth the power, resisteth the ordinance of God: and they that resist shall receive to themselves damnation. For rulers are not a terror to good works, but to the evil. . . Wherefore ye must needs be subject, not only for wrath, but also for *conscience* sake. (Rom. XIII, 1-5)

王侯貴族や聖職者の身分は「神」によって決められたものであるから、何人もその自由意志によってそれを侵してはならないという教えは、マキアヴェリ思想の流入によって脅かされつつあった王権にとって、その存続の根拠として利用されていた。王を殺害し、王権を奪う行為は、その目的が、仮に、「外れた世の関節」を直すという聖なる目的のためであるにせよ、それを個人の自由意志によって達成しようとする限りにおいては、テロリズム的行為であることに違いはない。ハムレットの心の内奥に波のように起こる“conscience”が、彼の行動を阻止するのである。

ある視角から眺めると、『ハムレット』は「回心劇」として読むことができるだろうし、また、殉教者パウロの寓喩として解釈することもできるだろう。宮内大臣の庇護を受けていたシェイクスピアの一座にとって、王権がその根拠としていた宗教思想を広く普及し、「神」の代理者たる国王を礼賛する儀礼的要素が芝居の核を成していることは、劇作家が何よりも重視すべき規律であった。つまり、パウロのいう“conscience”に従うことこそ義の人への道であるというモラルが教示されていることは、芝居の大原則であるといえる。しかし、冒頭に述べたように、ハムレットの“conscience”は、少なくとも、その一面において、人を非道へと誘う悪なる意識であるようにも読めるのだ。すなわち、ある見方をすれば、『ハムレット』は“sacred text”ではないということだ。以下、テキストに則して、その点についてみてみよう。

2. 本文における“conscience”の使われ方

『ハムレット』において“conscience”という言葉がでてくるのは、すでに引用した3幕1場の独白場面だけではない。“Conscience”は作品のキーワードの一つとなっていて、テキストには合計8回使用されている。すでに引用した例を除く他の7つの例について確認してみよう。

まずは、2幕2場282行目。ハムレットはこう言う。

The spirit that I have seen
 May be the devil, and the devil ...
 ...
 Abuses me to damn me. I'll have grounds
 More relative than this. The play's the thing
 Wherein I'll catch the *conscience* of the King. *Exit*

(*Hamlet* 2. 2. 575-82)

旅役者達の演技からハムレットはある着想を得ている。ハムレットが出会った亡霊が、人間を騙す悪魔である可能性が否定できない以上、その亡霊が述べたことが真実であるという確信は持てないし、また、亡霊に従って復讐を成し遂げることは、彼自身の“conscience”に反する行為である。芝居を王の“conscience”を照らす鏡として利用すれば、それによって王の心に“conscience”を見出すことができると、ハムレットはここで考えている。王が、“conscience”の働きによってその罪を告白したとき、はじめて、ハムレットはデンマークの君主として王を裁くことができるのである。

次に、3幕1場52行目。クローディアスはその傍白の中で“conscience”を使用している。

[*Aside*] How smart a lash that speech doth give my *conscience*.
 The harlot's cheek, beautied with plast'ring art,
 Is not more ugly to the thing that helps it
 Than is my deed to my most painted word. (*Hamlet* 3. 1. 52-55)

ハムレットの憂鬱の原因は破れた恋のせいであると信じるポローニアスが、そのことを王の御前にて証明する計画を持ち出す。オフィーリアに娼婦のような化粧をさせ、芝居じみた台詞を覚えさせてハムレットを待たせ、二人の対話を蔭で立ち聞きしようという、その場面で発せられる

クローディアスの台詞がこの引用である。クローディアスのいう“that speech”とは、本文ではこの引用のすぐ前に印刷されているポローニアスの台詞

We are oft to blame in this:
 'Tis too much proved that with devotion's visage
 And pious action we do sugar o'er
 The devil himself. (*Hamlet* 3. 1. 48-51)

を指している。ポローニアスのこの台詞がクローディアスの“conscience”を痛く鞭打っている、というのである。

次に“conscience”が出てくるのは、4幕5場128行目。レアティーズの次の台詞である。

How came he dead? I'll not be juggled with.
 To hell, allegiance! Vows to the blackest devil!
Conscience and grace to the profoundest pit!
 (*Hamlet* 4. 5. 126-28)

クローディアスがポローニアスを殺害した犯人であると信じるレアティーズが、クローディアスに対してこのように怒鳴りつける。この台詞に見える“[c]onscience and grace”は、文法的にはヘンダイアデイスであるから、“graceful conscience”という意味に解釈すべきであろう。そのようなものなど地獄の底(“the profoundest pit”)に沈んでしまえと、レアティーズは言っている。つまり、その心のうちに沸き起る“counter-conscience”と呼ぶべき復讐心に従う決意を表明しているのである。また、この場面では、デンマークの民衆もレアティーズの決意を強く支持している。すなわち、デンマーク全体が“conscience”を失い、罪一色に染まっている——言い換えれば、亡霊によって王国が崩壊へと導かれてい

ることを意味している。

ここでレアティーズが消し去ろうとしている“conscience”は、クローディアスによって再び彼の心に呼び起こされる。それが、次の“conscience”が出てくる4幕7場1行目の台詞である。

Now must your *conscience* my acquittance seal,
And you must put me in your heart for friend, (*Hamlet* 4. 7. 1-2)

“Conscience”に苛まれている罪人であるという点で、レアティーズとクローディアスの二人は共通している。レアティーズに起こる復讐心の矛先をハムレットの方へ向けようとするクローディアスは、皮肉にも、その復讐心にとって最大の障害となる“conscience”をレアティーズの心に呼び覚ましてしまう。そして、その“conscience”は、彼の怒りを鎮静化してゆく。教会でハムレットの喉を掻き切って(“cut his throat i' th' church”)復讐を遂げたいなどと表明するものの、その後のレアティーズを突き動かすことになるのは復讐心ではなく、“conscience”と、それによって生じる王権への“allegiance”ということになる。

5幕2場240行目に、5つ目の“conscience”が出てくる。毒の塗られた剣先で、今まさにハムレットを切りつけようとするその瞬間、レアティーズはこう言う。

LAERTES [*aside to* CLAUDIUS] My lord, I'll hit him now.
KING CLAUDIUS [*aside to* LAERTES] I do not think't.
LEARTES [*aside*] And yet 'tis almost 'gainst my *conscience*.
(*Hamlet* 5. 2. 238-40)

クローディアスこそ悪の根源であったことが判明した今、正統なる君主であるハムレットを殺すことは神への反逆行為である。“Conscience”という語を含むこのレアティーズの傍白の一行は、そのことを言い表すも

のである。一方、クローディアスの方も、もはや“conscience”の呵責に耐えることが可能な状況ではない。ハムレットに飲ませるつもりであった毒杯をガートルードが飲んでしまったことで、もはや「神」の裁きを逃れることは出来ないと思ったクローディアスには、それ以上の悪事について策を講じることはできない。クローディアスのその心理状態が、彼の“I do not think’t”という言葉に巧く表れている。以上の5つの例を見る限りでは、“conscience”は聖なる秩序を形成してゆく、善良なる観念として機能していることが確認できるだろう。

しかし、5幕2場59行目と68行目にある2つの“conscience”は、上の5つの例とは別の印象を与えるものである。

HORATIO So Guildenstern and Rosencrantz go to’t.

HAMLET Why, man, they did make love to this employment.

They are not near my **conscience**. Their defeat

Doth by their own insinuation grow.

’Tis dangerous when the baser nature comes

Between the pass and fell incensèd points

Of mighty opposites.

HORATIO Why, what a king is this!

HAMLET Does it not, thinks’t thee, stand me now upon—

He that hath killed my king, and whored my mother,

Popped in between th’ election and my hopes,

Thrown out his angle for my proper life,

And with such coz’nage—is’t not **perfect conscience**

To quit him with this arm? And is’t not to be damned

To let this canker of our nature come

In further evil? (*Hamlet* 5. 2. 57-71)

この場面での“conscience”もそれまで一貫して使われてきたものと、意

味の上で矛盾することはない。罪に支配された暗黒なる世界を、聖なる方向へと導く意識が“conscience”であるとするなら、クローディアスの悪企みによって派遣され、その国書をイングランド王へ手渡すことで、イングランド王の手までを罪に染めようとしている、ローゼンクランツとギルデンストーンを殺すことで、ハムレットが“conscience”による謗りを受けることはない。しかし、二人はハムレットの友である。ハムレットは友情よりも“conscience”を重んじた結果、二人を殺したことになるのだ。また、クローディアスの刃が、デンマーク王国の正統なる君主その人に向けられたことを確信したハムレットにとっては、もはや、王を自らの手にかけて殺すという残忍な行為こそ“perfect conscience”だという。それまでハムレットに復讐を禁じてきた“conscience”が、その大義名分とされているのである。

3. “Conscience”の二面性について

『ハムレット』において“conscience”は、二つの意味を帯びているといえる。一つは、怒りや憎悪に毒された人間の心を清め、国家全体に平安をもたらす善意としての意味。そして、もう一つは、個々人の有する人としての情より、キリスト教徒としての信仰を重んずべきという合理性である。復讐や自殺という行為を阻止するその同じ“conscience”が、他方では、ローゼンクランツとギルデンストーンを殺すという非道な行為を咎めはしない。つまり、“conscience”という一見“fair”なものが翻ると“foul”な側面を露見させることを、シェイクスピアは示しているのである。ハムレットを、仮に、劇中における「道化」と捉えることができるなら、シェイクスピア劇の道化の一つの役目は「ことばの遊び人」(“corrupter of words”)である¹³⁾。道化の存在は、当時、芝居が、いわば「関節が外れた世」を描く無礼講的な時空であったことを物語っている。道化の誘発する笑いは、現実世界における“fair”なるものの“foul”な一面を提示することによって、一時代的価値観によって自己形成された観

客のエゴの中において発生する無我への願望とでも称するべきエネルギーを開放していたと考えられる。

シェイクスピアやその時代の観客は、セネカに代表されるストア派哲学の影響を強く受けていたから、あらゆる真理に対して懐疑的であったと考えられる。そのことを裏付ける一つの例が、当時の絵画におけるアナモルフォーズと呼ばれる技法の流行である。自然に見えて一つの明確な意味を帯びているものが、視点 (perspective) を変えてみるとまったく予想外の別の意味を帯びてくるのが、そうした絵画の特徴である。シェイクスピアにおける「外面」と「真実」の乖離というお馴染みのトポスは、この絵画の技法を応用したものと考えられる。“There is nothing either good or bad, but thinking makes it so” という不可知論的な哲学を受け入れるとき、ハムレットの心境は仏教でいう「無我」の境地に限りなく近づいていたと考えてよいだろう。〈善と悪〉を絶対的なものとして解釈するのではなく、判断する側の考え方によるものと解釈するとき、万物はアンビヴァレントなものとして映る。シェイクスピアの芝居がしばしばそのような視角を観客に提示することを、私たちはよく知っている。

“Conscience” の二面性については、シェイクスピアの大きな関心事であった。『ヘンリー五世』がそのことを最も鮮明に映し出している作品である。1幕2場には、ヘンリーのフランス領地継承権の要求が正当な要求であることを根拠付ける議論が展開されるシーンがある。一見、一般庶民にとっては高度な歴史的リタラシーが要求されるように聴こえる、サリカ法の有効性に関するカンタベリー大司教の台詞に、誰にでも理解できる平凡な言葉で語られた次のような件がみえる。

Nor did the French possess the Salic land
 Until four hundred one-and-twenty years
 After defunction of King Pharamond,
 Idly supposed the founder of this law,

Who died within the year of our redemption
 Four hundred twenty-six ... (*Hen V* 1. 2. 56-61)

キリスト教を国教とするフランスがサリカの国を獲得したのは、紀元後——すなわち、キリストの誕生後——であったと語られている。したがって、サリカ法が、キリスト教の教えよりも優先されてはならないというのだ。また、サリカ法の創始者と考えられているファラモン王が没したのは、紀元後426年が経過した時点だから、そもそも、サリカ法は、フランスがサリカの国を獲得した時点で、すでに効力を持たない法律であったというのだ。カンタベリー大司教がすぐに述べるように、聖書には、「ある人が死に、男の子がいないならば、その嗣業の土地を娘に渡しなさい」(民数記27-8)と書かれているので、この教えこそ法律よりも重視されるべきだというのがその理由である。要するに、現地の法律などは無視し、フランス側から見て女系子孫にあたるブランタジネット家のヘンリーにフランスの公爵領を相続させることが正義に反しないと、カンタベリーは主張しているのである。

結局、ヘンリーは、武力をもってフランス領を求める決断をする。この芝居において幾度となく強調されるように、戦争が、双方にとって、多くの戦死者をだし、結果、多くの女達が未亡人となり、多くの子供が孤児となり、多くの乙女達が婚約者を失うという結果を招く、極めて非人道的な手段であることは、観客と同様、ヘンリー自身もよく理解している。しかし、ヘンリーは、自分の要求が「権利と良心に照らして」(“with right and conscience”) 正当なものだという結論に達する (1. 2. 96)。結果、「正義の戦」という名もと、残酷な手段でフランス領を獲得することになるが、ヘンリーがその旗印としている“conscience”は、常に、人を、清く、人道的に正しい方向へ導くものではない。シェイクスピアは、そのことを一人の兵士にこう語らせている。

I am afeard there are few die well that die
in a battle, for how can they charitably dispose of anything,
when blood is their argument? Now, if these men do not die
well, it will be a black matter for the King that led them to it—
who to disobey were against all proportion of subjection.

(*Hen V* 4. 1. 134-38)

大義名分がその味方とはいえ、戦争という殺し合いの場で死んでゆく者達が、ありがたい気持ちで死んでいくことなど、まず、ありえない。真実を言いあてたウィリアムズのこの言葉は、ヘンリーの次の台詞によって応えられる。

Every subject's duty is the King's, but every subject's soul is his own.
Therefore should every soldier in the wars do as every sick man in
his bed: wash every mote out of his conscience.

(*Hen V* 4. 1. 164-67)

このように語られると、パウロの教えを信仰する者たちにとっては、“conscience”は美化され、聖なる意識として解釈されることだろう。しかし、そのように語るヘンリー自身も、別の場では、

We are not tyrant, but a Christian king,
Unto whose grace our passion is as subject
As is our wretches fettered in our prisons. (*Hen V* 1. 2. 241-43)

などと述べ、大義名分がヘンリー個人の本心に反していることを示唆している。ある場面において、ヘンリーが「地獄の口のような良心」(“conscience wide as hell”) などというオキシモロニックな表現を使う件があるが(3. 3. 90)、それは、ヘンリー自身が、“conscience”の二面性を強く

意識しているためであろう。

“Conscience”の二面性は、チューダー神話の形成と深く関与した政治的言説である『リチャード三世』においても描かれている。チューダー神話形成の過程で他者として規定されてゆくリチャードが“conscience”に苛まれる。1幕2場の口説きの場面^{ウーイング・シーン}では、未亡人アンの有する信仰心や“conscience”は、リチャードの毒舌の口説き^{ウーイング}の前では「忍耐の城」とはなりえなかったが、終盤になると“conscience”がリチャードの精神を崩壊させてゆくことになる。

My conscience hath a thousand several tongues,
And every tongue brings in a several tale,
And every tale condemns me for a villain. (*Rich III* 5. 5. 147-49)

この場面で、自らを“devil”とさえ称したリチャードが、チューダー神話が表象する聖なる力に対して敗北を期すことになる。しかし、この芝居でも、やはり、観客は“conscience”を単眼的には捉えない。5幕5場において、リチャードの“conscience”を増幅させているのは亡霊である。亡霊というダークな存在が“conscience”と結びついているという想像力が、観客の側に喚起されるのである。そもそも、この芝居においてリチャードの心に“conscience”を植えつけるのは、マーガレットの「呪い」である(“The worm of conscience still begnaw thy soul” [1. 3. 219].)。マーガレットは、あらゆる「魔女」の資質を備えた存在として——すなわち、ダークな存在として——描かれている。つまり、リチャードの“conscience”は奇術によって生じた恐るべきものであると読める。その同じ“conscience”が、チューダー王家成立の歴史を物語るこの芝居の言説において、聖なる秩序をもたらす正義とされているのである。シェイクスピアを他の作家と区別する特徴の一つが、彼が得意とする「二枚舌」(equivocation)の技法である。

シェイクスピアに影響を与えたと考えられる芝居として、ナサニエル・

ウッズの『良心の葛藤』(1581年刊)が挙げられる。この芝居の粗筋はこうである。ラテン語に通じ、聖書を自分で解釈して議論することのできるフィロロガスは、ローマ法王を頂点とするカトリック教に疑念をいだく。そのことから、法王の護衛である「貪欲」(Avarice)、「圧制」(Tyranny)、「偽善」(Hypocrisy)、「感覚の誘惑」(Suggestion)や枢機卿(Cardinal)らによる脅迫を受け、改宗を迫られる。フィロロガスは「コンシシエンス」(Conscience)をその拠所とし、説得に応じようとはしない。“I will answeare to every demand, / According to my conscience, Goodes worde being my warrand” (1116-7) とか、

Saint Paul to the Romans, hath this worthy sentence
I accompt the afflictions of this world transitory,
Be they never so many, in full equivalence:
Cannot controvaile those heavenly glorie : (1526-29)¹⁴⁾

などと主張し、改宗を拒否する。しかし、後半、コンシシエンスが舞台に登場し、「感覚の誘惑」との間答が始まると、フィロロガスの心には迷いが生じ、結局、彼は改宗する。すると、「恐怖」(Horror)が登場し、フィロロガスに絶望を経験させる。そして、その絶望はフィロロガスに次のような確信を与える。

King David alwaies, was elect, but I am reprobate,
And therefore I can find small ease, by weighing his estate.
(2304-05)

家臣の妻を見初めて子を儲け、しかも家臣を殺す罪を犯したダビデは、「神」の罰としてその子を奪われはしたが、第二子であるソロモンはその王位を継承するに至った。そのダビデは「選民」(“elect”)であったから救われたのに対し、今や「救済の見込みのない者」(“reprobate”)と

なった自分は「神」に見放された者であると、フィロロガスは言っているのである。この後、フィロロガスは絶望の淵に追いやられ、自らの命を絶ってしまう。

以上が作品の粗筋だが、いくつか興味深い点がある。一つは、“conscience”が「美德」として描かれてはいるものの、それに忠実に生きるためには人間の有する自然の情との葛藤を伴うという点。もう一つは、この意識が、他者を規定してしまっているという点である。ここに、シェイクスピアへと受け継がれてゆく、アナモルフィックな視角の原形を確認することができるだろう。

このような文脈に戻して『ハムレット』の“conscience”を考えてみると、その輪郭が鮮明になる。一見“sacred text”とみえるシェイクスピア作品は、じつは、必ずしもそうではなく、^{ベガシ}異教的なものの考え方を否定しない包容力を有しているのである。

Coda

『ハムレット』という芝居の輪郭をマクロな視点で捉えると、“conscience”が支配する聖なる秩序の崩壊で幕が開け、その回復をもって幕を閉じる芝居であるといえる。というのは、子フォーンブラスがデンマーク王になることで劇が終了しているからである。シェイクスピアは、三つの状況のよく似た復讐プロットを描いている。ハムレットが父ハムレットの仇を討つ復讐、レアティーズが父ポローニアスの仇を討つ復讐、そして子フォーティンbrasが父フォーティンbrasの仇を討つ復讐、という三つの復讐プロットである。その三つの復讐は、いずれも達成されずに終ることになる。すでにみたように、ハムレットとレアティーズの復讐心が鎮静化するのには、“conscience”の働きによるものであるが、その同じことはフォーティンbrasの復讐心についてもいえる。幕開けのシーンにおいてデンマークの兵士達が、安息日を返上してまで国家の防衛を強化していた理由は、復讐心に燃えるフォーティンbrasによる脅

威から国家を守るためであった。しかし、4幕4場に登場するフォーティンブラスは、それまで描かれてきたような復讐鬼ではない。蘊しべほどの価値しかない領地を獲得するために、数千の兵を率いて戦いに挑もうとしている。かつて、“[U]nimprovèd mettle hot and full” (1. 1. 95) に駆り立てられていた王子が、今や“divine ambition” (4. 4. 39)¹⁵⁾ によって導かれてゆく姿を、観客は目撃するのである。つまり、フォーティンブラスも、ハムレットやレアティーズと同じ変容を遂げたといえるだろう。フォーティンブラスがデンマークの王位継承者として、ハムレットの“dying voice” (5. 2. 298) を受けることになるのは、彼が“conscience”によって支配された人物であることをハムレットがその身をもって認識したからであるといえる。フォーティンブラスがデンマークの王位を継承することによって、「世の外れた閑節」が戻ってゆく。——これが『ハムレット』という芝居のマクロな構造である。つまり、『ハムレット』という芝居は“sacred text”としての構造を有しているといえるだろう。

しかし、ハムレットは、その生涯のストーリーを未来へと語り継ぐ弁士としてホレーショーを任命する。このことが、芝居の“sacred text”としての構造を脱構築してゆく。ハムレットが「心の友」と呼ぶホレーショーは、亡霊という“conscience”を有さない他者に対し、真摯に理解を示そうとする唯一の人物である。“Conscience”を絶対とする道徳観念を離れ、「目には目を」というハンムラビ法的正義の視点から、キリスト教徒の聖なる世界を傍観する視覚を、彼は有している。ホレーショーのその学者的態度は、どこか、ベドラムのトムに扮するエドガーを「学識あるテーベ人」(Lear 3. 4. 145) と呼び、必死にその意見を求めようとするリアの「狂気」を想起させる¹⁶⁾。しかし、その「狂気」ゆえに、ホレーショーは、“conscience”が“fair”でかつ“foul”であることを看破するハムレットの唯一の友とされるのである。未来へと継承されるハムレットの物語に、ホレーショーの視点が加わることで、テキストはその構造を自ら脱構築してゆくのである。

冒頭に引用した “Thus *conscience* does make cowards of us all” には、表裏する二つの意味が込められているといえる。一つは、いうまでもなく、「こうしてコンシエンスが人を臆病にする」という意味。その裏に広がりを見せるもう一つの意味として、「こうしてコンシエンスは人を卑怯者にする」というものがあるだろう。その第二の意味は、それを、パウロの亡霊による呪縛から開放された未来の読者によって、テキストがひもとかれるとき、含蓄を帯びてくるといえる。これは、王権を礼賛し賛美する芝居を書くことが要求されていた^か彼の時代には、亡命を余儀なくされた “conscience” の一つの意味を、文化的他者である私達に託そうとするシェイクスピアの巧妙な「二枚舌」によるものであると考えられる。

注

- 1) 本稿は、2008年5月22日（木）、広島女学院大学文学館302号教室にて催された特別公開授業（英米文学入門 a）のために準備したノートに手を加えたもので、2008年11月1日（土）、岡山大学にて開催された第61回日本英文学会中国四国支部大会にて朗読した原稿である。2008年4月11日（土）、大阪ヒルトンホテルのレストランで元立命館大学助教授の野口忠昭先生にお会いした折、先生が執筆中である『ヴェニス商人』の Lancelot Gobbo の “conscience” に関する論考の内容を拝聴しながら、シェイクスピアの “conscience” について私なりに考えたことを書き記したノートが本稿のもとになっている。なお、本稿は、平成20年度科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号：20720086）による研究成果の一部であることを付記しておく。
- 2) テキストは Stephen Greenblatt et. al. eds. *The Norton Shakespeare Based on the Oxford Edition* (New York: Norton, 1997) を使用。以下、シェイクスピア作品からの引用はすべてこの版に基づいている。
- 3) Alexander Schmidt, *Shakespeare-Lexicon*, the 4th edition (Berlin and Leipzig: Walter De Gruyter & Co., 1923) より引用。
- 4) C. T. Onions, *A Shakespeare Glossary*, ed by Robert D. Eagleson (Oxford: The Clarendon Press, 1986).
- 5) “Conscientia” は語源的には “con” (together) + “scīre” (to know), つまり “to

- know together”ということ。
- 6) *The Holy Bible Containing the Old and New Testament* (1611) (Philadelphia: National Bible Press, 1975) から引用。以下、聖書からの引用はこの版を使用している。
 - 7) E. Mac Mahon, “Conscience”, *New Catholic Encyclopedia* (New York and elsewhere: McGraw-Hill Book Company, 1967), 196–203, 197。また、以上のパラグラフに記された情報は、この同じ記事によるもの。
 - 8) Thomas F. Merrill, ed. *William Perkins 1558–1602 English Puritanist: His Pioneering Works on Casuistry: “A Discourse of Conscience” and “The Whole Treatise of Cases of Conscience”* (Nieuwkoop & B. De Graaf, 1966), 7.
 - 9) 「君子章句上」8に孟子のこの考え方が明示されている。
 - 10) Thomas F. Merrill, ed. *William Perkins*, 44.
 - 11) オクスフォードのボドレー図書館に所蔵。Frederick James Furnivall, *The Digby Plays: With An Incomplete ‘Morality’ of Wisdom Who is Christ* (London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., 1896) にて読むことができる。
 - 12) パウロの名は、テキストには合計7回使用されていて、そのうち6回はリチャードの台詞にみえる。また、いくつかの場面は、聖パウロ寺院付近にて起こることも、この芝居の特徴の一つとなっている。
 - 13) 『十二夜』の3幕1場31行目に、道化フェステが自分の役目はオリヴィアの“corrupter of words”であると定義する有名な件がある。「ことばの遊び人」は、小田島訳を借用したもの。
 - 14) 引用は、*The Conflict of Conscience by Nathaniel Woodes 1581* (London: The Malone Society Reprints, 1952) による。
 - 15) 4. 4. 39は Q2 のみに存在する行であることは断っておかなければならない。
 - 16) Shakespeare の描く「狂気」は視点を変えれば「正気」でもある。これも Shakespeare 流の“equivocation”であろう。

Works Cited

- The Conflict of Conscience by Nathaniel Woodes 1581*. London: The Malone Society Reprints, 1952.
- Furnivall, Frederick James. *The Digby Plays: With An Incomplete ‘Morality’ of Wisdom Who is Christ*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., 1896.
- Greenblatt, Stephen et. al. Eds. *The Norton Shakespeare Based on the Oxford Edition*. New York: W. W. Norton & Company, 1997.

- The Holy Bible Containing the Old and New Testament*. (1611). Philadelphia: National Bible Press, 1975.
- Joseph, Bertram. *Conscience and the King: A Study of "HAMLET"*. London: Chatto and Windus, 1956.
- Mac Mahon, E. "Conscience". *New Catholic Encyclopedia*. New York and elsewhere: McGraw-Hill Book Company, 1967. 196-203.
- Onions, C. T. *A Shakespeare Glossary*. Ed. Robert D. Eagleson. Oxford: The Clarendon Press, 1986.
- Perkins, William. *William Perkins 1558-1602 English Puritanist: His Pioneering Works on Casuistry: "A Discourse of Conscience" and "The Whole Treatise of Cases of Conscience"*. Ed. Thomas. F. Merrill. Nieuwkoop: B. De Graaf, 1966.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare-Lexicon*. The 4th Edition. Berlin and Leipzig: Walter De Gruyter & Co., 1923.
- Sugden, Edward H. *A Topographical Dictionary to the Works of Shakespeare and His Fellow Dramatists*. (1925). Hildesheim: G. Olms, 1969.
- 「パウロ」. ピーター・カルヴォコレッジ著・佐柳文男訳『聖書人名事典』. 東京: 文教館, 1998年. 101-107.